
修羅の一族・咎人語り

織田亜由実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

修羅の一族・咎人語り

【Nコード】

N7841Y

【作者名】

織田亜由実

【あらすじ】

一介の農民の身分である少年雁真は妹、菊と共に貧しいながらも幸せな生活を営んでいたが……

簡単資料・人物紹介（前書き）

見なくても結構です。特にネタバレだ、と思われる方などは。大丈夫、という方でもおそらく理解できない部分があると思います。いや、理解できる筈がない。

この資料は物語の進行上、より分かりやすく理解できる作りになっていますので、読まれなくても差し支えございません。

簡単資料・人物紹介

人物紹介

* 以下は物語中に登場する人物達の紹介。

・ 雁真（十六～十七）

百姓の素朴な少年。十年前に都の火災で両親を亡くしている。以後は農家の男に養子として引き取られ、育てられる。しかし、その一年後に訪れた冷害による飢饉によって再び孤独の身となる。その後は骨身を削り、何とか生計を立てて現在の村に落ち着いている。趣味は読書で、町では書物を通しての知り合いが多く、比較的人脈が広い。情には流されない性格だが、女子にはやや甘くなる。容貌から、周囲にはお人好しだと思われる。

・ 菊（十四～十五）

百姓の少女。九年前の冷害の飢饉で両親を失い、孤児となっているところを運よく雁真に拾われ、育てられる。直向きな性格で、相手に尽くす事で生き甲斐を感じている。家事が得意で、寝相が悪い。読み書きはできないが、生れつきの聡い面を持っている。心身深く、次の世で両親と再び家族になれる事を信じている。

・ 菖蒲（十五）

朱劔族の少女。一族を裏切り、逃亡している最中に雁真に出会う。殆どの種類の花を嫌う中、彼岸の花だけは愛でている。人との必要以上の馴れ合いを嫌う暗い性格だが、強い意志と気骨な精神を秘めている。

・ 十六夜（十六）

朱劔族の少女。名家出身の見目麗しい娘で、異性を引きつける生れ

つきの香りを持つ。おっとりとした気品を漂わせ、人に対する態度は見境ない。外に出る事を固く禁じられている筈だが、巧みに監視の目を躲して自由に歩き回るなど、掴み所がない。

・夜草（二十～三十？）

朱劔族の瘦躯の男。月詠家鵜竜郎党「銀豺」の一人。一匹狼での私情を絡めた勝手な行動が多く、党内ではほぼ孤立している。性格は頓着で曲がっており、変質な遊戯を愉しんでいる。咎人狩りを嗜好している。

・月宵（十九～二十五？）

朱劔族の青年。これは通称で、正式名称「月詠鵜竜月牙」。粹な道楽者で、捻くれた性格をした美貌の男。好色で、女を取っ替え引っ替えしている。同時に人斬りを好み、残虐な噂も絶えない。反面芸を嗜んでおり、笛吹の名手でもある。

・明枷（三十～四十？）

朱劔族の男。正式名称「月詠亀臈老帥明枷」。月詠家先代、四代の弟。冷酷な性格をしており、斟酌する事は余りない。何よりも誇りを重んじ、人の情は顧みない。過去には躊躇なく自らの妻を処している。

・理蝶（十四）

朱劔族の少年。若き月詠家五代で、正式名称「月詠天霧五代理蝶」。赤紫の瞳を持っている。年の割には落ち着いており、外の年寄からはその態度をよく思われていない。亡き父親を厭い、姉の色香を苦としている。

・鴈雲（十六）

朱劔族の、暗殺を生業としていた少年。鵜竜郎党「銀豺」の一人。

出自は不明で、当人も幼少期の記憶は喪失している。人との交際を不得意とし、また嫌悪している。無欲で、相手に形式的に尽くす事で生きてきた。根暗な性格で、やや自堕落な生活を送っている。

・紅蘭（十八）

朱劔族の赤毛の女。鵜竜郎党「銀豺」の紅一点。男勝りの性格で、女つ気を消している。健啖家で、食べられるものであれば何でも躊躇なく食べる。形振り構わない努力家。

・雪那（十七）

朱劔族の佳人の女。陰刻竜・碧白華の娘で、白銀の髪と薄紫の目を持つ。聡明で、面倒見が良い。病弱で常に床に臥せているが、気丈に生きている。月宵が唯一心を赦した女性でもある。

・雪乃（十五）

碧白華と思われる千草色の目の少女。黄人の女に育てられた。無垢な花のように可憐な容姿を持つ娘だが、やや常識力に欠け、浅学で物覚えが悪い。非常に繊細で傷つきやすく、頻繁に体を壊している。

故人

・雁真の両親

父親が町で商いを営む商人だったが、十年前に起こった火災により建物が全焼し、それに巻き込まれて死んでしまった。

・男（享年三十？）

孤児となった雁真を拾い、育ててやった百姓の男。気さくな性格で、周囲の人間からは慕われていた。九年前の飢饉で、同じ農村の仲間

に殺された。

・菊の両親

九年前の飢饉の時に菊を放置し、食糧を求めたが、飢えと渴きに苦しみながら悶死した。

・四代（享年四十？）

月宵家四代目。当主としての期間は僅か五年だった。二年前に病を患い、悶えながら急逝した。

・葛葉（享年二十五）

四代の妻。十四の時に彼と契り、二人の子を産んだ。多情な女で、夫婦仲は余り良くなかった。何者かに因って斬殺された。

・秋菊（享年十六）

明枷の妻。結婚して間もなく黄人の男と駆け落ちを計らい、これに憤激した明枷の手に因って処刑された。

・三代（享年五十～六十？）

月詠家三代目。葛葉や葛葉の子達を可愛がっていた。最期の際は一族の者達に囲まれ、遺言を遺して安らかに逝った。

その他

・書子（二十～二十六）

朱劔族の男。理蝶の側近の一人で、記録係を務めている。趣味は読書で、堅物。

・老松（六十）

朱劔族の老翁。理蝶の世話係兼側近で、三代の頃から務めている。

・初（三十四）

山奥に住む女。娘を流産で亡くし、夫とは死に別れた。当時赤子だった雪乃を拾い、愛情を込めて育て上げた。気丈で人情味がある。

・虎鉄（二十一）

朱劔族の青年。鵜竜郎党「銀豺」の一人。務めには忠実だが、お人好しが白壁微瑕。鴈雲と共に行動を取る事が多い。

・闇珠（十・十二？）

朱劔と思われる赤目の少年。

その他諸々

*以下は便宜上の簡単な資料いろいろとなる（追加有）。

修羅の一族・咎人語り

（あらすじ）

百姓の少年雁真は妹の菊と共に貧しいながらも幸せな生活を営んでいた。しかし、美しい少女、菖蒲との出会いによって彼の運命に大きな変化が兆そうとしていた。

道ならぬ血の交わり、虚しき性、そして可憐な咎人を追う下卑た男の歪んだ笑み――

惹かれ合ったが為に傷つけ合った、若者達の宿命の物語。

（種族別特徴概説）

*物語中に出てくる種族名称単語の解説。

「黄人」肌の黄色い人種。特に東黄人を指す。頭髮が黒く、目は茶褐色（黒色）。背は低い。かつて南蛮の民が皮肉を込めて使用した

言葉。

「朱劔」白い肌の人種。南蛮との混血、中国と南蛮の混血とも言われている。この殆どが二重瞼で、鼻筋が通っている。強靱な肉体を持ち、好戦的。頭髪の色は様々。

「人外」妖魔に取り憑かれた人。人に害を為すもの。化け物。

（月詠家概説）

* 月詠家血族。

「身体特徴」頭髪は鈍色、或いは黒。目の色も同様。家主となる純血のみが赤紫で、満月の夜には黄金に輝く。

「体性質」酒には滅法強く、顔が赤らむまで飽かず飲み続ける上戸揃い。また艶聞が多く、揉め事も多い。

（陰刻竜概説）

* 名家陰刻竜血族。

「碧白華」陰刻竜から派生した一族。本家との違いは性質がまとも、戦闘能力は皆無に等しい、冬に強い等。

「身体特徴」頭髪は銀色、目は赤無垢。ただし碧白華の目は薄紫。小柄で童顔が多い。

「歴史」最も古い歴史を持つ家系で、数百年続いているとされる。始祖は古代中国に実在したとされる戦人、黒死龍。

物語基本構成

第一部・序章：（雁真編）

第二部・本編：（菖蒲編）

第三部・外伝：（朱劔編）

まとめ

・物語キーワード：会者定離・縁は異なるもの味なもの・昨日は人の身今日は我が身

・参考資料（人物日本の歴史：江戸っ子〔小学館〕・人物日本の歴史：農民一揆〔小学館〕・図説江戸：町屋と町人の暮らし・江戸の町と暮らしがわかる本……etc）

雁真編 老章 雁真（前書き）

一話目。

赤を薄く引き伸ばしたような暮れの空に、鰯の群れたような陰影のない雲片の雄大な様を見上げて、彼は音もなく笑った。

「今年は、飢饉から逃れられたな」

その黒髪は涼やかな風にそよがれ、彼はどこか愁いにも似た思いに浸っていた。決して端麗な容貌とは言えないが、面立ちの穏やかで人好きしそうな姿をした少年だった。年の頃は十四、五だ。擦り傷の目立つ右手には、黄金色の今にも零れ落ちそうな穂を蓄えた稲が二、三把程、睨^{しか}と握られていた。

「本当に安心した。今年は冷害が訪れなくて良かったね、お兄ちゃん」

冷たい土を踏む音と共に、一人の小柄な少女が歩み寄ってきて、彼の隣に並んだ。肩の上で切り揃えられた黒髪の手端が、彼同様に僅かに揺れている。彼の妹の、菊と言う。未だ十二のあどけない少女だった。

そう、この土地はつい昨年まで冷害に悩まされていた。今より六年前の冷害の年、この娘の両親は饑餓により帰らぬ人となったのだ。それを憐れんだこの少年の親切によって、当時寄る辺の無かった菊は引き取られたのだ。つまり、正しくは“義妹”である。

彼は妹の頭の上に手を乗せると、慈しむように撫でてやった。

「うん、良かったな。祈りが神様にきちんと届いてる証だ」

「来年も、その次の年も祈り続けようね」

菊はこれ以上にないと言ったような満面の笑みで彼の着物を掴み、甘えるように擦り寄ってきた。十二にもなつてこの調子で懐いてくるのだから、彼としては将来無事に自立できるかどうかで気苦労が絶えなかった。その都度自分は親身だな、と思いながら苦笑した。

「それまでに生きていられたらね」

「やだ、そんな不吉な言い方」

菊は厭そうに頬を膨らました。彼はそんな妹の幼い面を見て、可笑しげに笑った。

「御免な。でも兄ちゃんはな、すぐにでも菊に一人前になって欲しいんだな」

菊は小首を傾げた。

「どうして？」

妹からの突然の疑問に、彼は一瞬迷う。

「どうしてって……まあ、自分の面倒は自分で見ないとな。兄ちゃんの身に何時、何が起こるか分からないんだから」

「またそんな事言つて。悲觀的なんだから」

菊の仏頂面を見て、彼はまた自分の悪い癖が出たな、と他人事のように思った。殊自分の身に関しては、妹の将来が絡んでくることもあつてどうも案じずにはいられなかった。

「俺、悪い事したみたいだな」

菊に控えめにそう言うと、

「そうでしょ。毎度そうやって私を不安にさせて、私は絶対にお兄ちゃんから離れないからね」

語気強く、菊はぐつと彼の腕を抱き締めてきた。言葉通り、離すまいと。いじらしい娘だと、自然と彼の口から笑みが零れた。そして次の瞬間、彼からはふとある悪戯心が湧き、一つ声を上げていた。

「あつ、菊が余りに強く締めつけてくるものだから腕が潰されそうだ！　これだけ遅しければ一人でも生きていけるな」

「えっ？　……もうっ、驚かさないでよっ。潰れるわけないじゃない」

菊は一瞬跳び上がって腕から飛び退くも、案外直ぐに気づかれた。彼女の顔は不機嫌一色だ。

「あれれ？　真に受けないのか……」

彼は呆然とした。これは冗談でも悪戯でもなく、半分本気だった。少しくらいの効果で菊をその気に傾けられるものだ。

「お馬鹿さんね。私、もう十二だよ。そんな悪戯もう弁えてるわよ」

「つまらないなあ。もうそんなものか……」

そう、菊はもう十二だ。あの頃の、六つの娘ではないのだ。彼此……そう、既に彼此六年もの歳月が過ぎていたのだ。

彼の目は六年間もの記憶の流れを瞬時にして辿り、年に似合わず早くも追懐していた。

「苦悩はあったけど、案外早いものだな。この調子で、菊もあつという間に何処かに輿入れするんだろうな」

「やだ、やめてよっ」

その時、如何にも悲鳴じみた声を上げ、菊がぱつと抱き着いてきた。彼は傾いて転びそうになるのを何とか踏み堪える。丁度彼女の頭が、彼の顎の下にきた。その体は怯えるように、微かに震えていた。

「私、知らない男の人になんか嫁入りできないわ。だって、お兄ちゃん以外の人は信用できないもの……」

不安と哀しみに打ち沈んだ、幼い少女の声。

彼は困ったような顔で菊の頭を撫でてやった。彼のみならず、彼女にも悪い癖はあるのだ。それが人間の性なのだろう。

「菊……甘えちゃ駄目だ。女の方は配偶者がいないと、とても生きていけないよ」

「私にはお兄ちゃんがいるものっ」

菊は益々抱き着く手に力を込めてくる。彼女の涙ぐんだ声に、彼はこのままではいけないと思った。

「き、菊。分かったよ。一旦落ち着こうか」

彼は妹の肩の上に手を置き、そつと体を離した。菊は暗く沈んでいた顔を上げ、瞳を潤ませた。彼はそれを見て、僅かに罪悪感を抱いた。

彼は一度だけ息を吐くと、腰を少しだけ屈ませて菊と視線を合わせた。

「お兄ちゃん……」

菊の不安に歪んだ顔を見て、彼はやれやれと苦笑した。もう十二歳と表現しても、やはり未だに十二歳である。

「兄ちゃんの事、好きか？」

彼がそう確認すれば、菊は幼子のようにこくりと頷いた。彼も内心でよし、と頷いた。

「お前は兄ちゃんに迷惑かけても良いと思うか？」

引き続き確認を取れば、菊は今度は首を横にぶんぶん振って強く否定した。彼の中では申し分ない反応だった。

「だったらな、兄ちゃんの言う事はできるだけ聞いてくれないか？
勿論お前との二人暮らしは、俺にとつては神様が与えて下さった
尊く幸福なものだよ。でも結婚する事もまた、尊くて幸福なものな
んだよ」

「う、うん」

相変わらず菊の表情は暗いが、一生懸命に耳を傾ける分には救い
ようがある。彼はそれを確認した上で、優しく微笑んだ。

「菊は賢い子だ。甘え癖は中々考え物だけど、人を信じる事は大切だぞ」

「う、うん。お兄ちゃん」

菊には徐々に、明るい笑顔が取り戻されてきた。彼はほつと胸を撫で下ろし、彼女の頭を撫でてやった。

「でもお兄ちゃん。今は私、お兄ちゃんと一緒にいて良いでしょ？」

「そりゃそうさ。こんな甘えん坊、今はとても手放せないからな」

「ふふつ。お兄ちゃん大好きっ」

菊の顔には、溢れんばかりの幸福が満ちた。

さわさわと揺れる芒の茂みの中、二人の兄弟の仲睦まじく寄り添う影があった。

雁真は、鄙^{ひな}びた小さな村で妹と二人暮らししていた。

彼等の村では現在水稲耕作を営んで収入を得ているが、雁真達兄弟にはどうもそれだけでは家計が心許ない為、雁真がたまに町の方へと稼ぎに向かっていた。

雁真は余暇などにはよく村の外れの木立の下で書物を読んだ。これは町にある貸本屋から借りてきたもので、雁真は低い身分の者にも拘わらず文字を読み、読解する能力に長けた稀少な人物でもあつ

た。ただし彼が新たな本を持ち帰る度に決まって妹は顔を顰め、勿体ないなどと咎めてくるのだ。

家で休むにしても妹の視線で落ち着かない。それ故にこうして人気がない場所に行き着き、ゆったりと寛げているのだ。

収入の関係で本は然程多く借りられない。彼は一冊一冊をじつくりと丁寧な脳に暗記していった。そして妹に御伽話を聞かせてやれば、これが顰めっ面を作る割には好評だった。毎夜のように話をせがまれては、快諾したり疲労がつて渋ったりだ。

そして丁度今、

「お兄ちゃん。また月に帰ったお姫様のお話を聞かせてよ」

妹の菊は粗末で薄っぺらな掛け布団に体を包んだ恰好で、寢床に横たわっていた雁真の傍らに極当たり前のように体を横たえた。

二つの枕の狭間で暗い夜の室内にゆらゆらと揺れ動くのは、油の差された唯一の灯火ともしびである。

「今日は無理。兄ちゃん、疲れてるんだよ」

「疲れてるようには見えないよ？」

菊の顔には不満の色。

無理もない。雁真は今日、実際には然程疲れを溜めていなかった。それでも、彼とて必ずしもそのような気分になれるわけではなく、今宵はとつと静かに寝てしまいたい気分だった。

「文句は言わない。自分とこ戻れ、火消すぞ」

雁真が促すと、菊はその場から離れる事無くにこりと笑った。

「一緒に寝ていいでしょう?」

「また?」

菊はうん、と可愛げに頷いてみせた。

雁真は常の事ながら半ば呆れ、半ば受け入れ態勢だった。とはい、成るべく離して寝かせてはいるが、強いてという程でもない。流石に疲れた時などは一人で眠るのだが。

菊はもう十四。家族とは言え嫁入り前の妹と寝るのは何とも気が引けるものだが、菊にいたっては諦念すらあった。

雁真は頬杖をついた恰好で、息を吐く。

「はあ。夫婦でもこんなに近くないぞ」

雁真は既に彼の両親で見知っていたのだ。つかず離れずが丁度良いと。

だが菊はそんな思いにも構わずに、雁真の胸に顔を当ててきた。

「その人達は情が冷めているんだわ」

「こら、そんな事言うんじゃない」

自分の両親を貶されたような苦い心地で雁真は菊を叱るが、彼女は微かに眉を寄せるのみだ。口喧しく咎めようにも妹可愛さに絆されてかどうも躊躇われ、彼はこれ以上きつく言う事はできなかった。

「近づき過ぎる事の何がいけないの? 私達は相思相愛なんだから」

そう冗談めかして言って、菊は雁真の体に腕を絡めてきた。これ

以上の馴れ合いはいけないと思ったが、今の雁真にはこの腕を除けるのが億劫だった。

「親しき中に垣をせよ、と言うだろう？ 親しみも深過ぎれば、逆に不幸を招く事になるんだ。だから家族なんかでも、一定の距離を以って接する形が理想とされているんだよ」

雁真がそう教え諭せば、

「お兄ちゃんたら。そんなの、ただの言葉じゃない。人を深く愛する事はとても純粹で、素晴らしい事よ。丸でそれを否定されてるよ、うで、私、嫌いだわ」

菊が一層深く雁真の胸に擦り寄ってきて、彼は内心で恋人のような距離だな、などと複雑な気持ちになる。

決して言葉は軽いものではない。言葉にこそ重い意味が込められている事を、この娘は無知故に知らない。その事もどうにかして諭したかったが、やはり胸の内に押し止める。

得手勝手とまではいかないが、どうも菊は我が儘な性格である。とても今の状態では自立できたものではないし、今暫くは雁真の保護が必要だ。彼としては憂慮せずとも年月を経ていくにつれ、娘が自然しおらしくなるのを直願うばかりだ。

「お兄ちゃん、温かい」

菊は甘え声で笑みを浮かべ、微睡みながら瞼を閉じる。先程まで読み聞かせをせがんできた事の嘘のような速さ。

「仕方ないかあ……」

雁真はそう呟く。実際は仕方なくもないが、雁真自身がこのまま

安眠したかった。

ただ、いよいよこれも考え物ではある。

「……………お休み」

一先ず今夜は見逃す形を取り、雁真は妹に就寝の挨拶をすると、彼女の体をのそのそと越えて灯台の火をふっと消した。

夜四つ半時の出来事である。

「ふう……………」

手を休め、疲労に溜息を吐いた。玉のような汗の浮いた額を腕で拭えば、土混じりの水が僅かに擦りつく。体は容赦ない重労働にすっかり草臥れ、節々が痛む。

昼間の水田にて、雁真は雑草抜きをしていた。雑草は少し目を離している隙に直ぐに伸びてくる。稲の養分を吸われては堪ったものではなかった。

「おうい、雁真あ」

自分を呼ぶ声に彼が顔を上げれば、年配の農作仲間の男が向こう側の道で手を振っていた。

「飯にしよう」

その言葉を聞き、雁真はようやく飯にありつけるのか、と自然笑みを零した。腹の音は随分前から鳴りつ放しだ。

雁真は水田から裸足を出し、脱ぎ置いておいた草鞋を履いて男の元に急がず焦らず向かった。斜面を、肩を左右に大きく揺らしながら上がり、男の前に立つ。

「ははっ、鼻っ面が汚れてんぞおめえ」

男は握り飯の乗った竹皮をこちらに渡しながら、からからと笑う。雁真は申し訳ばかりに白米の混じった粟の飯を受け取りながら、一瞬何の事やら目を丸くし、臆て自分の鼻についた見えざる汚れを袖で拭い取りに掛かった。さぞ不恰好に見えたであろう。

「色男が台無しだわな」

「そんな、大したもんじゃないですよ」

雁真は愛想笑いで返す。決して謙遜などではなく、迷惑とすら言えた。

年寄りというものは、若者ならば矢鱈やたらにこうした同じような評価をしてくる。年寄り連中に混じって労働する数少ない若僧の雁真など尚更だ。これはある意味、若者に対する皮肉とも言える。

町で見掛ける芸者は美形揃いで、住人達も町という格が相俟って見渡す限りが華やかで優美である。それに引き換え、雁真は体から土の臭うような田舎者で、恰好は地味で薄汚れており、見るからに垢抜けない。これを色男などと言われれば、町中にはどっと笑いの大波が押し寄せる事だろう。

雁真は丸い握り飯を手に取り、一口齧った。そしてもぐもぐと有り難く玩味する。

「ほれ、水だ」

男が頃合いを見て水筒を差し出し、雁真はそれでごくりと咽を潤した。

「はあ。これで昼も何とか一踏ん張りできそうです」

「おう。若い内はしっかり働きな」

男は気さくに笑い、自分の分の飯を持って去っていった。

雁真は田に続く斜面に腰を下ろし、地面に竹皮を置くと、一人黙々と食事を再開した。

彼の眼前には、背が高くなりもうじき収穫期を迎えようとする稲が広がっている。この共同水田は雁真含める村の農民達が手塩に掛けて育ててきた賜物となる。

今年も難無く実りそうだと彼は満足げに笑んだ。

その時、雁真はふとある花に吸い寄せられた。水田の付近に咲き連なった、赤き彼岸の花に。妹の菊が“地獄花”だと言って忌み嫌う。だが、妹には内緒ではあるが、雁真はあの花にどこか妖しげな美しさを感じていた。しかし何にせよ、あれも直に収穫せねばなるまい、と彼は割り切った。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「私、お兄ちゃんのお嫁さんになりたいなあ……」

雁真が菊と二人で帰路についていた時の、彼女の口から発せられた何気ない言葉だった。丸で満更でもないように、夢見る娘の顔になっっている妹を見て、彼はぎよつとした。そして一瞬真に受けてしまった自分自身に呆れ果て、自嘲の笑みを浮かべた。

「魂消た。菊が突然変な事言い出すから、兄ちゃん心の臓が止まるかと思つたぞ」

本当に、心臓に悪い。今だに音はときどきと落ち着きが無かった。

すると、そんな兄の態度に菊は不満げな顔で、

「お兄ちゃんたら、柔なのね」

それを聞き、雁真はむっとなる。これはいくらお人好しと言われる彼とて、聞き捨てならぬ言葉だった。

「菊、言葉にも限度つてもんがあるぞ。目上に向かって柔とは何だよ」

「だって、言葉の一つで心の臓が止まる程度なら、命が幾つあつても足りないじゃない」

昔から兄の言う事には忠実だった筈の菊が、今では妙にも反発の色が強い。否、これは丁度拗ねている子供のようにも見えなくはない。どっちにしる厄介ではあるが。

「あのなあ、何をそんなに向きになつてゐるのさ」

「違うものっ」

菊は不機嫌面で、雁真からぷいと顔を背けた。
嫌われてしまったな、と雁真は密かに苦笑した。

「違うもの……」

菊が力無く呟くように言ったその言葉を、雁真は聞き落とした。

「菊？」

急に大人しくなった菊の様子を不審に思い、雁真は訝しげに妹を覗き込もうとする。彼から背けられ、見えない顔を。

まさか、落ち込んでいるのだろうか。こう見えて、繊細な面を持つ娘だ。

その時、菊が出し抜けに顔を向けてきた為、雁真の心臓が再び大きく跳ねた。寿命が幾らか縮められたような気分だ。

そして雁真は目を丸くし、呆然とする。菊の顔は意外にも笑っていた。したり顔と言う奴だろう。

「なんてね。私、お兄ちゃんには嫌われたくないもの」

それを聞き、雁真はほっと胸を撫で下ろす。

「俺だつてそうだ。曲がりなりにも愛情込めて育ててきた妹なんだから、俺も尊敬される兄ちゃんではないとな」

「うん」

菊は優しく、にこりと笑った。この時、彼女に初めて年相応の少女の姿を見たような気がし、雁真の胸の中はじわりと温かくなる。彼女も確実に、成長しているのだと。ここまで苦勞して育てた甲斐

があつたという、充足感もまたある。

「私、今の暮らしが幸せなんだよ」

菊は雁真の腕に手を絡め、肩に頭を預けてきた。妹の小さな体からは体温が伝わり、冷涼な空気の中では心地好い。

「夫婦って、こんな感じなのかしら」

「さあ、どうだろう」

雁真はそれをさらりと躲した。

だが、内心ではそれは少し違う、と確信していた。夫婦であれば、否でも応でも幾分か情が冷めるものだろうから。

雁真編 式章 菊（前書き）

二話目。

雁真編 式章 菊

農民の仕事は夜明けから始まる。

雁真は明け六つ時の鐘を撞く音で妹と二人で起床し、朝餉を採つてから未だ薄暗い仕事場に出た。

空は白み、空気は沈んだように閑散としている。二人は未だ静かなる眠りに落ちている田を横手に、田圃道を歩いていった。他の住人達もそろそろと田に広がってゆき、徐々にその数を増やしていった。全員が夜明け特有の沈んだ空気に馴染み、溶け込んでいる。

「はあ。お兄ちゃん、今日も大して食事採らなかったね」

菊は眠たげに、呟くようにそう訊ねてきた。寝起きのせいか、その声は昼とは違って小さく、掠れている。

「そうか？ ……寝不足だからじゃないかな」

一方の雁真は眠たげと言うよりも、竄れているようだった。瞼は未だ完全に開き切っていない。

「寝不足って、お兄ちゃん夜更かししたの？」

「まあね。お蔭様で」

雁真は意識的に妹からやや顔を背け、昨夜の出来事を思い出して苦笑いを浮かべる。菊は首を傾げるが、彼の寝不足の原因が彼女自身である事にやはり気づいていない様子だ。

菊は一見可愛い娘だが、その実寝相が悪い。その都度雁真は被害に遭っており、酷い時は顔を蹴られていた事もある。

ただこの事実を本人に明かすのも酷な気がして、菊が雁真の事を好いているのが目に見えているだけに、その分彼女の受ける衝撃の大きさも容易く想像につく。だから菊には一応言わないでおく決めていた。

「変なの」

そんな雁真の考えている事など知る由もない菊は、彼に疑るような視線を向けてくるのみだ。だが直ぐに興味をなくし、

「今日もお仕事が無事終えられますように」

いつものように目を瞑り、手を合わせると、天に祈った。

「菊に縁組、ですか」

雁真が半ば呆然としてそう聞き返せば、向かいにいる、作業用の鎌を片手に持った中年の男が頷く。その日の作業の休憩中に、仲間の男が突然持ち出してきた話だった。

「嫁入り先に、不都合はないだろう」

「ええ、勿体ないぐらいです」

この突然の知らせを聞いた時は一瞬耳を疑い、真まことなのかと驚いたが、このような重大な折目の含まれた話題に偽りの気持ちなどある筈がない。

素直に嬉しくなり、驚きに強張っていた雁真の顔には次第に喜色

が滲み出た。

「でもどうして名主^{なぬし}さんの息子さんが」

「菊は村一番の美人だからな」

「はあ、菊が」

雁真は、あの十四歳の我が妹が……と心の中で気が抜けたように続ける。確かに愛らしい娘ではあるが、美人とまでゆくと過大評価になるのではあるまいか。何せ彼には、記憶にある美しい町娘の艶やかな姿が未だに離し難い程に鮮明である。

「お前に似ずにな」

男は冗談めかして笑い、雁真も一先ず苦笑で返した。無理もない、元より血の繋がらぬ兄妹だ。菊が多少美人であろうと、彼のものは結局は素朴な農夫面である。

否、こう思うだけ無意味な事だろうからここでよしておこう。

「妹に伝えておきます」

兄の務めとして、当人にこの吉報を知らせよう。今日の仕事が終わりに、家に帰り着く頃にでも。きっと、非常に喜ばしい一日を終えられる事となるだろう。雁真は思わず、にんまりと笑った。

「でもいいのか」

「はい？」

男の顔は、必ずしも快く祝福できないと言ったような雰囲気だった。

「あれだけ仲がいいと村では評判の兄妹だ。お前の唯一無二の家族と別れる事になるんだぞ」

男の当然と言えるその言葉に、雁真は目を丸くして暫し無言となる。確かに菊の結婚は、自然のままに雁真との別れを意味しているが。

「何も……別の土地に移るわけではないし、菊が望めば夜以外、何時でも会えますよ」

衣食住は共にできなくとも、この狭い村の中では何時でも出会える筈だ。だが流石に仕事の最中に顔を出されるのは控えて欲しい、と雁真は内心で付け加える。

すると、男は感心したように何度か頷いた。

「へえ、お前も一人で生きてけるって事だ」

男は、褒めているのだろう。雁真が妹無しでも辛うじて立派に生活できるのだと。確かにそれも正しくはあるが、もっと別の理由に因^よるところもある。

「或いは、一人の方がよっぽど楽でしょうね」

雁真の声音は、不思議と淡々としていた。彼はどこか覚束ない瞳を僅かに伏せ、溜息を吐きたくなる衝動を噛み締めて、堪えた。

「あの娘は、近過ぎるんです。だからこうして一気に突き放してや

った方が、却って幸せなような気がするんですよ」

雁真は彼に似合わず、家庭での感情を他人の前で吐露していた。丸でこれは、否、これこそが神様の巡り合わせなのだろう、と雁真は信じて疑わなかった。

菊は清涼の秋気漂う空を仰ぎ、昼中の雲の平穏に流れる様を澄んだ瞳で眺めていた。

「過ぎるなあ」

「ん？」

隣でそう呟いた妹の声に反応してちらと横に目を遣れば、襷で袂をたくし上げた恰好をした菊が、ぼんやりとした顔で雲を目で追っている。それに釣られて雁真も上空を見遣るが、何ら変哲のない晴天の風景に当然の如く興味を無くし、再び菊の顔を見た。すると、丁度彼女と視線が重なった。

先程、雁真が草の斜面に腰を下ろして田の景色を眺めているところに、菊がやってきて彼の隣に座ったのだ。彼女の顔は改めて自然の広大さに接してか、そこはかとなく落ち着き払っている。

「時が過ぎるなあ……って思ってた」

それを聞いた雁真は、ああ、とやや遅れて言葉の意味を理解した。菊は悠久の大空の中に瞳を浸し、時の流れを肌で感じていたのだ。

「うん、そうだな」

雁真が適当に返事すれば、この素っ気ないと言える態度に菊は僅かに眉を顰めた。

「お兄ちゃんたら、悠長なのね」

「俺達が年を取るのなんて、分かりきった事だからな」

それこそが天命であり、地上に住まう人々にはどうにもこうにも揺るがしのない定めだ。不老不死の薬を求めて旅に出たところで空しく、この世では人は年を経る事に甘んじなければなるまい。

菊は、それがよく分からない、不可解だ、と言わんばかりの様子で雁真の顔を覗き込んできた。

「お兄ちゃんは死ぬのが怖くないの？」

「さあ、どうだろう。余り考えた事ないなあ」

自分の死、については幾度も考えた事がある。だがそれ自体に直面した時の感覚、また感触が如何なるものであるか、そこまで神経質に憂慮、或いは期待したという記憶はない。

そもそも人は、死を迎えるのが普通である。善行を積みめば天国、悪逆を尽くせば地獄。そうやって古き時代の数多の前人達はこの世から絶え間無く消えていったのだ。それなのに死を恐れて、一体何が変わるというのだろう。否、変わる筈がない。

雁真は可笑しくなり、思わず笑みを零した。

「菊は怖いのか？」

「普通の人なら怖いよ」

暗に雁真は変だ、と言っている。彼は何が変なのかよく分からなかった。

「でも死なんてのは人には等しく訪れる、免れないものだぞ」

「でも、死んだらもう大切な人には会えなくなるんでしょう？」

不満と哀しみの入り混じった顔を向けられ、雁真はきょとんとし、しかし臆て苦笑する。

「その人との今生の縁さえ良ければ、きっと次の世でも一緒にになれるさ」

菊は目を丸くする。

「じゃあ、父様や母様とまた一緒にになれるかな」

「菊……」

「え？」

雁真は、呆然として菊を暫く見詰めていた。だが直ぐさま視線を離し、再び彼女の方を向いてそっと笑った。

「一緒にになれるよ、絆さえあれば。うん、絆は大切だ」

雁真は、丸で父親のそれでもあるかのように菊の頭を愛撫した。

「菊は良い娘だから、きつと神様もお前の望むままにしてくれる」

「そうだいいな」

菊は頬を薄く染め、柔らかく笑った。

幾分か大人びてはきたものの、未だ幼さを残すこの妹がもう結婚するのか——と、雁真は何とも不思議な思いだった。彼ですら未だ経験のない事である。

菊は女だからまだ良かった。だが男である雁真の場合は、ある程度の稼ぎの余裕でもない限り、とてもではないが嫁は貰えない。運がなければ、生涯独り身も有り得る。しかし兎にも角にも、菊は幸せになれそうだ。雁真は顔に喜悦の色を浮かべ、口を動かしていた。

「棚から牡丹餅、だな」

「え？」

菊は目を丸くし、小首を傾げる。

「何？」

「ただ、幸せでさ」

雁真は、妹に優しく微笑んだ。菊もそれに満足したように、微笑み返した。

「うん」

雁真は天を仰ぎ、先程の菊と同じように悠久の流れの随まにまに心を委ねた。時は流れ、時代は移ろう。人の姿は変わってゆき、いずれは誰もが平等に死を迎える。そして新たな命が産声を上げ、人は絶え間無く続いてゆく。いつか雁真という一人の人間の命が終わりを迎えても、人という存在はこの流れと共に永劫に在り続けるのだろう。菊も雁真に釣られるように再び空を仰ぎ見て、その中に世の無窮を感じ取った。

「お兄ちゃん」

菊は、雁真の地面につけて草に埋もれた掌の上に彼女の手をそつと重ねる。そして身を寄せ、彼に顔を近づけてきた。

「ん？」

雁真が横に顔を向ければ、直ぐ至近には鈴を張ったような大きな瞳の、僅かに揺れる様があった。何かを躊躇するかのような、そんな色の出た顔だ。

「菊？」

雁真が不思議に思つて彼女の名を呼ぶと、菊ははっとしたように目を見開く。臆て淡く笑い、首を横に振った。その仕種がどこか哀しげに見えたのは、気のせいだろうか。

「ううん、何でもない。何でもないよ。御免なさい。ただね……お兄ちゃんの顔を見ていたら、どんなに哀しくて辛い事があっても、救われる気がして」

菊の頬が、ほんのりと赤く染まった。

「菊……」

流石にそこまで言われると、雁真も照れ臭くなってくる。しかし極力感情を表に出さないように努めた。

「俺はそんなに、大層な人間じゃないのに」

菊はこんなにも深く雁真を慕っている。果たして、例の結婚の話を切り出したなら、彼女はどんな反応を彼に見せるのだろうか。

花よ、不変であれ。常盤ときわに純美たれ。

美しく、儚げな少女のような響き。

消えては現れ、また消える。

彼はこの脆く壊れやすい花を幾度も抱いては幾度も散らす。そのような幻が時折彼の元に夢となつては訪れ、礎はたと思ひ出したようにまた消えゆく。それは何時しか彼の胸の中に美しく、強かに生きていた。

雁真編 参章 縁談（前書き）

三話目。

雁真編 参章 縁談

生温い柔風が毛先をやんわりと揺り動かし、頬や脚を幾度も擦り、撫でてくる。空気は温かな熱で籠り、鼻腔を満たす。空は一点の瞬きすらなき闇で塗り尽くされているというのに、足元一面は鮮やかな朱色が照り映えている。

彼岸の花、だった。彼岸の花が地に乱れ咲き、そこに本来ある筈の土色を覆い隠しているのだ。

雁真は四方に首を巡らし、ただ果然と立ち尽くすしかなかった。足元を花に取り囲まれ、容易に動かす事ができなかったのだ。

彼は神妙なる思いに囚われ、この摩訶不思議な空間の意味するところをどうにか考えようとする。だが、何か得体の知れないものがそれを赦そうとはしなかった。

雁真の自由を抑制する感覚。それは極柔らかく、やんわりと、彼の現状を推量しようとする複雑な思考を妨げた。

ふと雁真が次に気づいた時には、彼の視界には何かの大きな物体が、花に埋まるようにして横たわっていた。六間程離れた先にあるそれが初めからそこにあったのか、将又途中から急に現れたのかは雁真の知るところではない。少し目を凝らしてみれば、布を纏った人影のようにも見えた。細い印象を受ける。

雁真は一步を踏み出し、その人影に吸い寄せられるようにして歩を進めていた。朱き花を足で分けながら。

間が二間程に縮まったところで、一旦歩みを止める。その先に埋もれていたものは、やはり人だった。藍色に朱い花片を散らしたような模様の小袖を纏った、体つきからして恐らくは女。顔は見えない。

雁真は更に間を詰め、その距離は遂に一尺程となる。殆ど見下ろす形となり、だが彼は臆する事なく女を見た。

背中を丸め、膝はくの字に折り曲げている。横向きであろう顔は艶のある黒い長髪に覆い隠されていて惜しくも見えない。しかし女の唯一隠されていなかったその手は美しく、純白に輝くようだった。体格は華奢で、菊と同じくらいの娘に思える。そして、頭には彼岸の花の髪飾りが。心持ち着物は微かに揺れている。

雁真は緊張に、生唾を呑み込んだ。彼の中には、判然としない、だが歓喜にも似た感動が顔を覗かせつつあった。

彼女だ。

彼女が、彼の目の前に現れたのだと。

そう確信した瞬間、夢は、願いは、望みは、喜びは、確たるものとなった。

雁真は、震える口をそつと開いた。

「君だ……」

夢の娘。美しい声音の人。彼の心を捕えて離さない、儚い君。

—— やつと出会えた。 やつと。

「俺は、君にずっと会いたいと思っていた」

雁真は穏やかに、花の中に横たわったままの娘にそつと微笑んだ。丸で愛しき恋人に語り掛けるかのように。

「たとえ君が幻だったとしても、君はこうして、俺の中で生き続けている。君の声音は何時だって、哀しい響きを帯びていたね」

雁真は有りのままを語り掛ける。普段から感情を余り表に出さないようにしている彼だが、ここが自分の中であればこそ、恥じる事なく感動を晒け出し、素直になれた。

だが、彼女は死んだように応えない。しかし、きっとまだその段階ではないだけなのだと、雁真は当然として落ち着いた心持ちでいられた。

「——貴方なの？」

その時。

雁真ははっとし、目の前に横たわる彼女の体を見た。

鈴のように鳴る、どこかあどけない少女の響き。

「嬉しい、やはり貴方なのね」

嬉々とした感情。弾む心。それは紛れもなく彼女から発せられた、美しく慄とした、それでいて優しい音だった。

彼女は上体を起こし、緩りと音もなく立ち上がってゆく。甘い香りを漂わせながら。

さらりと細やかに髪は流れ、その下から白い顔がちらちらと覗く。そのまま緩りと顔をこちらに向ければ、長い前髪は自然左右に分かれ、そこからやっとうれしい微笑みが現れる。その言葉では形容し難い程の美しさに、雁真は見事なまでに圧倒された。

空気が甘ったるくなり、くらくらしそうになる。しかし負けじと意識を立て直し、何とか口を開く。

「君は、俺の事を知っているのか？」

今、初めて会う筈の彼女。よく見れば、菊よりもずっと大人びた雰囲気を感じている。

すると、彼女はくすりと上品に笑った。

「可笑しな人。私はこんなにも貴方をお慕いしているというのに」
「君が……………俺をか？」

雁真の問いに、彼女は肯定するでも否定するでもなく、ただ静かに微笑んでいるだけ。心持ちその笑みが深まり、彼には肯定しているように思えた。否、それは単なる彼の願望がそうさせたのかもしれない。彼女のような佳人が、雁真のような地味で冴えない一介の百姓などを、本気で思う筈などないのに。

雁真はつくづく自分が情けなくなり、自身を否定するかのよう
に首を横に振っていた。

「君こそ可笑しい。俺達は初めて出会ったばかりだというのに」
「いいえ、愛しい貴方。わたくし私達は永世に断たれる事なき縁えにしにより結ば
れているのです」
「えい……………せい」

雁真がぼつりと呟くように繰り返すと、彼女は初めて頷いた。

「ですから、私の貴方への愛は、また貴方が下さる私への愛は永久
不滅なのです」

彼女は彼岸の花の如く、艶やかに笑った。恰も彼女が、否、彼女
こそが彼岸の花の精である事を否が応にも思わせる程に。

雁真に対する言葉にしては余りにも情熱的で、恥ずかしいぐらい
だった。そう、その目は彼を見詰めているながら、別の人物に向けら
れているかのようにだった。

彼は彼女を求めていたが、彼女は彼ではない別の何かを求めている
という、矛盾にも似た得体の知れない違和感。それに、雁真は奇

妙な心地悪さを覚えた。

「君は…… 本当は誰を思っている」

掠れた声でそう訊ねる。視界の彼女の顔が一瞬ぼやけ、雁真の瞼は段々と重くなってくる。強制的に、眠りに落ちてゆくような感覚だった。

「貴方ただ一人です」

視界が覚束ない中、妙にも彼女の声だけは鮮明に彼の耳に届いた。意識も途切れ途切れになり、いよいよ目の前の世界も暗み始める。完全に暗くなる間際、判然としない筈の彼女の白い顔が、微笑みを浮かべながらこちらに近づいてくるような気がした。

雁真は、ぱちぱちと火の爆ぜる囲炉裏を無言で見詰めていた。宵の口に覆われた頃の、薄闇を照らす灯火代わりだった。控えめに踊る火は雁真の顔を、そして斜め前の筵の上に正座する菊の顔を水面の揺れるように赤く照らしている。

菊は怪訝そうに、だが今の雁真に同調するようなにこにこ顔で訊ねてきた。

「どうしたの？ 何か良い事があったみたい」

正に、その通りだ。

言い当てられ、雁真はにこりと肯定した。

「実は今日な、仕事の合間にめでたい知らせを教えて貰ったんだ。菊、お前にだ」

「私に？」

菊は栗目をぱちぱちさせる。未だ何も知らない、と言ったような自然な仕種だ。

「お前に縁談だよ」

「……………縁談、かあ」

菊は呟くように、極冷静にこの吉報を受け入れた。雁真の予想に反し、特に舞い上がるわけでもなく、嫌がるわけでもなく、却ってその反応は薄かった。それも、素っ気なさすら感じられる程に。この娘にしては、余りにも不自然な態度である。

雁真は、自分は今おそらく間抜けな顔をしているのだろうな、と滑稽な気分になる。

「大して驚かないのな」

「うふふ、期待してたんだ」

「まあちよつとは」

本当は大方だったが。

「もうすぐその時期かな、とは分かったたの」
「そうか…………」

こう見えてしっかりと心の準備は万全だったようだ。菊の思った外落ち着いた表情は、大人びている。知らぬ間にまた一段と成長したのだな、と雁真は温かく微笑んだ。

「忠次郎さんだ。名主さんのところの。思ったより良かっただろ？」
「うん。忠次郎さん、優しい人だから」

菊はにつこりと笑う。

忠次郎は雁真よりも三つ年上の好青年である。親無しの雁真達に良くしてくれた名主の息子でもある。

愛想が良く、人望もある。その彼に好かれている菊は、女としてこれ以上に無いぐらいの幸せ者だ。

「大切にしろよ」

「うん」

菊は照れ隠しでもしているのか、もじもじと落ち着かないように見える。常に有りのままに振る舞ってきた娘だけに、俄には信じ難い恥じらい振りである。可愛くはあるのだが。

菊は十四から十五にかけての丁度良い頃合いに伴侶を持てる。これで菊の将来への心配が取り除かれれば、後に雁真に残るのは彼自身の余り考えた事のない将来だ。

既に結婚の赦される年齢には達しているが、理想としては二十歳前後、遅くとも四十までであろう。四十までであれば、流石に世話焼きを介さずとも伴侶は娶れるだろうが。

「お兄ちゃん、考え事？」

気づけば、菊がこちらを見詰めている。雁真は今まで背中を丸め、頬杖をつきながら、顔を伏せてぼうつと物思いに耽っていたらしい。雁真の悪い癖、一度考え込んだらすぐこれだ。いけない、いけない、と背筋を伸ばす。

「俺も結婚について真剣に考えてるんだよ。独り身の男なんて見ていて侘しいからな」

「お兄ちゃんが誰かと一緒になるなんて、私、丸つきり考えられないわ」

「俺もだよ。このまま一本調子に、何事もなく細々とした人生を終えそうだな」

ある意味自虐ではあるが、雁真は自分に釣り合う娘が現れるとは到底思えなかった。が、女性への興味は並にあるし、憧れてもいる事に何ら変わりはない。

要は勇気が足りないだけなのかも知れない。

「それに、お兄ちゃんはお嫁さんを貰うというよりは、お嫁さんに貰われるって感じよね」

「菊、急に口が悪くなったな」

雁真は苦笑し、妹をじつと睨んだ。

それが万一現実になれば、情けない。余りにも情けな過ぎる。菊の悪戯めいた表情と意味合いから推測するに、おそらく婿養子とはわけが違う。

「そんなに兄ちゃん頼りないか？」

「ううん、凄く頼り甲斐あるよ。でもお兄ちゃんは亭主関白って柄じゃないよね」

「ふーん」

菊の語る自分の印象に雁真は素っ気ない風を装って返すが、内心複雑だった。亭主たる者妻を制してこそ妥当なものを、それでは嫁から尻に敷かれたも同然の評価である。

「大丈夫、私お兄ちゃんが良い人と巡り会えるように毎日祈るから」

そのにつこりとした笑顔に一片の悪意も感じ取れないのは、それが菊の本音なのか、或いは単に彼女が演技派なだけなのか。考えるだけ疲れ、雁真は溜息を吐いた。

「全く、言ったからには本当に頼むぞ」

「祈りはきつと届くわ」

一体全体何処からくる自信なのだろうか。果して祈りを捧げる事で、雁真の行く末にも奇跡という名の一つの瞬きが生じてくれるものだろうか。

彼はふと、一番近い日に見た夢の一時を思い出す。

彼が長年恋い慕ってきた“彼女”は、遂に秀麗な少女の姿形を取って彼の目の前に現れた。

彼女のその美しさは、想像を絶するものだった——彼が憧れ続けてきた町娘の魅力すら失せる程に——。彼女を一目見た瞬間、この世の全てのものが彼女の虜となり、恋い焦がれるに違いないと本心から思えた。

だが唯一奇妙なのは、彼女がこの世の者とは思えぬ程美しかったという印象と、白い肌に艶のある流れるような黒の長髪を持っていた、という記憶しか頭に残っていない事だ。

かつて魅了された筈の彼女の顔の造作を、雁真は知らない。

雁真編 肆章 女人佳麗（前書き）

四話目。

雁真編 肆章 女人佳麗

コンコン、と柔らかなものを隔てて石を叩く音がする。

雁真は丸石の上に束ねて湿らせた藁を置き、それを木槌で柔らかくなるまで黙々と万遍なく打っていた。

「菊の反応はどうだったよ。ん？」

すぐ近くから、雁真の意識を向けさせる男の呼ぶ声があった。

彼がそちらに目を遣れば、男がにやにやとこちらを見詰めている。つい先日、雁真に菊の縁談の話について持ち掛けてきた、世話好きの男だ。名前は彦三郎。年齢は人生の折り返し地点をやや過ぎた頃辺りだ。

雁真は現在、村の共同作業場にて商売用の草鞋作りをしている。

部屋の壁際には唐箕からこや杵臼などが置かれ、壁には農業道具類が掛けられている。土間上には囲炉裏を囲むようにして筵を敷き、数人がその上に腰を下ろして各々の作業に専心していた。

雁真が柔らかくした藁を次の分担の者が縄に緋い、最後にその縄を簡易な器具を用いて品物に仕立てるのが、この彦三郎の役割だった。

どうやら首を突っ込まずには要られない人の性分のもので、二人の兄妹のその後が気になるらしい。御定まりではあるし、知らせに来てくれたのはこの男であるのだから、雁真には当然の如く答える義務がある。

「大人ですよ。あの娘の事だから、もう少し感情的になるとは思ってたんですけどね」

雁真は作業の手を怠らず、コンコンと鳴る音を混ぜながら一つ男に笑ってみせた。

「ちゃんと受け入れた、か」

「はい。なんせ忠次郎さんですし、素直に喜んでいました」

彦三郎は、うんうんと納得したように頷く。

「年頃の娘が男兄弟にべったりするもんじゃないしな。旦那が怪気を起こすからよ。それに言っちゃ何だが、特にお前達は……」

雁真の手がぴくり、と止まる。

だがそれも一時だけで、彼は臆て困ったように微笑を浮かべた。

「そうですね。でも、俺達は小さい頃からずっと一緒だし、あの娘も本心から俺を兄貴として慕ってくれている。少し危なっかしいって時もあったけど、やっぱりどこまでも妹ですよ」

菊は、常に雁真に近かった。特に寢床での彼女の馴れ合いが過度に感じる日もあった。

一時は菊が可愛い反面、突き放しておきたいという思いも生じた。それは万一、兄妹としての絆を育んできた筈の菊との間に何らかの過ちが生じてしまったら——という危惧に対する警告から思い立った、回避行動だったのかも知れない。

しかし、あの時の殊の外落ち着いた菊の態度を受けて、自分のほただの余計な杞憂なのだと思いを改められ、雁真は今では大分心が穏やかになっている。

その心を読んで理解したように、相手は申し訳なさそうな顔で雁真に詫びてきた。

「取り越し苦労だったようだ。済まねえ、疑るような物言いしちまつたな」

「いえ、誤解を招くような事したのはこっちの方です。最近では菊も恥じらいを知る年頃になってきましたし、どうぞ赦してやって下さい」

「恥じらい」

彦三郎は、餌に食らいつく魚のようにその一言を敏感に捕えた。無精髭の生えた顎を撫ぜりながらにやにやする。

そして――

「くうつ――！ あんなに花のように可愛らしい娘が、憤ましくなるってかア。忠次郎も憎い男だぜえっ」

彦三郎は満ち満ちる羨望を堪えるように、だが溢れ出てしまったような状態で羨ましがった。もはや作業に目がいつていない。そして、場の全員の怪訝な視線を集めている事に未だ気づいていない。

「彦三郎、無駄口叩いてねえで手え動かさんかい」

その場にいる内の一人である俵を編んでいた初老の男が、眉根を寄せて見兼ねたように彦三郎を叱った。すると、彼はせつせと慌てて作業を再開し始める。

「おつといけねえや」

再開する直前、男は雁真にうつかり笑ってみせた。

「全くこいつあ、昔からお調子者でえ。雁真、おめえさんのようなしつかり者は稀やぞ」

初老の男は暫く愚痴を続け、雁真は返す言葉もなく一先ず笑った。

* * *

今日の風はやや強く、乾いているように感じられた。

「ふう……」

雁真は息を吐いた。

その後、何とか休憩を作って、彼は七日振りの読書に貪るが如く没頭した。返却期間が切羽詰まっていた為、休憩の時間をやや過ぎてしまった。いつもの村外れの場所にある木立の下で、幹に背中を預けて借りた本を読んでいたのだ。

雁真は読了した書物の表紙を改めて見て、そうそうそこの庶民が買えたものではない紙の表紙を撫でる。触り慣れたものだった。

雁真は本を脇に抱えてよいしょと立ち上がり、急いで村に帰ろうとした。その時だ。

「……え？」

背筋に、何かにべろりと舐め上げられるかのような、気持ち悪い感覚を覚えた。

間髪容れずに背中に手を回して撫で回してみるが、何事もなっていない。単に疲れているだけだろうか。兎にも角にもさっさと村へ引き返してしまおうと、不吉な予感を抱きながら足を動かした……

直後だった。

ガサリ。

葉の擦れ合う音に、雁真はどきりと体を強張らせる。木立の茂みからだった。狸か猪でも飛び出してきたのか——と一瞬思うが、その予想は次の瞬間、物の見事に打ち碎かれた。

雁真は目を見開く。

——彼女も、目を見開いた。

背後の茂みから突如現れ、雁真の真横に飛び出てきたのは女だった。

腰まで届く程に長い緑の黒髪はふわりと揺れ、衣も揺れる。その隙間からは花の淡い匂いが香るようだった。見開かれるのは黒曜石のような黒目がちの双眸。彼女の純白の肌には、その大きな瞳がよく映えている。

彼女の頭の側面から垂れる銀色の髪飾りが揺れる様を見て、シャラン——と清かに響いたように聞こえたのは、雁真の幻聴だった。

少女、と言った方が良いのかも知れない。それも菊とは然程変わらない、だが一目にはそう感じさせない雰囲気を纏った。

要するに、美しかった。美し過ぎて、理解が追いつかぬ程に。

町で見掛けたどんな芸者よりも、どんな弁天娘よりも。

雁真は、少女の得も言われぬ凜とした美しさに一目で虜となった。この世に、彼女以上の存在など有り得ないと思わせる程に。

「き、君は」

雁真が無意識に一步を踏み出すと、彼女は僅かに眉根を寄せて数歩後退った。彼はその警戒的な行動にはっとして、申し訳ない気持ちに満たされ、己を酷く恥じた。こんな事をするつもりは無かったのだと、無意味だとは分かっている、どうしようもなく辯解したいという抑制の難しい思いが早まり、正に口元まで押し寄せる。だがそれを遮るようにして言葉を先に発したのは、彼女の方だった。

「——私は、お前達黄人とは違う」

予想通りの、透き通った美声。その声は未だ幼いながらも耳に心地よく、だが、突き放すような棘を帯びていた。

「コド……？」

雁真は、彼女の言った聞き慣れない言葉を繰り返した。“お前達”とは、雁真の事を指しているのだろうか。

雁真は疑問を素直に顔に浮かべ、眉間に皺を寄せた。

「コド、とは何だ？」

「分からぬか。お前達黄色い肌の民の事だ」

彼女の双眸は、鋭く細められる。

彼女の肌は白粉おしろいをつけているわけでもないのに白く、それ以上に滑らかに見える。鼻梁も高めで、纏う振袖も質がよく、身動きに利便そうな軽い素材で織られている。このような身分的、体質的差異の激しそうな彼女に、黄色いだとかいう言い方をされても仕方無い事なのだろうか。

「では、君は何なんだ」

雁真が黄人であれば、彼女は。
率直な疑問だった。

「分からぬか。私は人だ」

「……俺だつて人だ」

雁真は苦笑する。この娘は、黄人というものを軽蔑しているのだろつか。もしや穢^{えた}多や非人などと同視しているのではあるまいか。丁寧にコド、という蔑称までつけて。

否、それでは全員が全員非人となり、切りが無いではあるまいか。

「——コドだろうが何だろうが、俺達が人である事に変わらない。そんな差別っぽい言い方をされる謂れなんてないぞ」

雁真が僅かに眉根を寄せれば、相手に一瞬躊躇いの色が浮かんた。

「け——けれど、お前達は劣等種じゃないか」

やはり。

今の一言で、コドというものをよく理解できたような気がした。

「劣等種……」

たった今貶されたのだという事実、に、啞然とした。

「劣等種って、確かに君は綺麗な娘だけど——」

「えっ」

少女が目を見開き、呆然としたのを見て、雁真はしまった——と即座に口を閉ざした。しかし己の緩い口を叱咤しようにも、時既に遅し。不覚にも飛び出していった彼の本音は、少女の白い顔を見る見る赤く染めていった。恰も狐に撮まれていたかのように瞬かせていたその丸い瞳は、忽ち揺るぎなく引き締まり、その柳眉の尻は忽ち引き上げられた。

「戯けた事をよくも」

その美しく幼い顔は怒りに染まり、下手に刺激した動物の威嚇する様を連想させた。彼としてはそれは恐怖、と言うよりも、失敗を仕出かした事への恨めしさ、と言った方が断然しつくりとくる。正直、こんな奇麗な少女に自分がこんな態度を取られているのだと思うと、雁真は男としてどうしようもなく惨めで情けない。故にこの険悪な状況をここは穩便に、真っ先に処理せねばならないと急いで頭を働かせる。

「済まない、気安い言い方をしてしまった。どうか赦して欲しい」

端から見れば見苦しい体かもしれない。だが、無礼を働いてしまったからにはたとえ悪意が無かったとしても、こちら側から妥協せねばならない。でなければこの娘がいよいよ遠ざかるのみだ。

怒りに細められていた彼女の双眸は、更に雁真をきつと睨みつける。先程とは打って変わり、その黒々とした深みはどこまでも相手に付け入る隙を赦さない。

「何故、謝るの？」

「え……」

彼女の口から静かなる響きを帯びて出た言葉は、雁真の耳に妙な余韻を残してふっと消えた。

どうして予期できようか——彼女から彼へ返されたその問いを。

「何故、私のような小娘などに。憎い癖に」

少女の疑るような瞳。

しかしそれが余りにも純粹過ぎて、余りにもあどけなく感じられて。雁真は顔を綻ばせ、思わず笑いを零さずにはいらなかった。

「可笑しく……なったのか？」

彼女は半ば呆れるように、半ば戸惑うように、その瞳の警戒を揺るがせた。その様子がまた、雁真の目には純粹に映って仕方無い。

「いいや、至って冷静だよ。ただ、どうして君がそんな疑問を持つのかと思って」

「先程言った筈。憎い相手より先に折れるなんて、嘸や屈辱であるうに、嘸や惨めであるうに。お前には矜持というものがないのか」

彼女の表情に、言葉とは裏腹に一瞬寂しい影が過ぎったように感じた。彼女がこれまでに歩んできた過去の軌跡。彼はそれを刹那に垣間見たような気がした。

——触れてみたい。……と思うも、その一瞬湧いた浅はかな欲望を、雁真は躊躇無く押し殺す。

そして彼はふっと微笑を浮かべて、首を緩く横に振った。

「だからってその矜持ばかりを優先して、仮に俺が君を罵ったところで、切りがないと思うよ。互いに憎しみを深め合うだけだ。君に

はそう思えないのか」

「知ったような口を」

彼女が苦い表情を浮かべるのにも構わず、雁真は続ける。

「それに、どうして俺が君を憎む必要なんてあるのさ。君はただ、純粹に俺の事を図々しい、嫌な奴だって思っただけなんだろう？」

憎まれて然るべきなのは俺の方だよ。きつとあの言葉で君を傷つけたんだとしたら、俺はとんだ………つみびと罪人だ」

こんなにも美しい娘の心を、万一傷つける形となっていたのなら、そのような人間がこの世のどこかに、万一存在するのだとしたら。

それは罪深き罪人を差し置いて、彼には外にないとすら思えた。

瞬間、一陣の風が吹きつけ、彼女の長髪を宙に絡め取った。一頻り弄ばれた髪は聴てさらさらと彼女の肩に、背中に落とされてゆく。雁真は、その彼女の意思とは無関係の、挙措にすら魅せられていた。

彼女は無表情だった。無表情に、雁真を見詰めていた。

「本当に、図々しい。いいえ……おいら鳥澁がましいんだわ。嫌らしいぐらいに」

彼女の顔は、憎々しげに歪められた。心の奥深くから呪うように、祟るように。残酷にも、丸で雁真への嫌悪の眼差しを隠そうともしなかった。

「私、貴方のようなお人好し嫌い。やっぱり黄人と私達とでは、永遠に相容れないのよ」

「お人好しなんて、そんなつもりじゃ」

雁真が焦り、何とか辯解しようと口を開き掛ければ、彼女の鋭い視線がそれをいとも容易く制してきた。

「やめて、見苦しいのよっ」

彼女は不快に満ちた顔で声を荒げた。その顔が如何にも苦しみに苛まれているように見え、雁真にはこれ以上言えよう筈が無かった。

「……御免」

そして、また謝る。

これ以上の得策が思いつこう筈がない。耳障りな言い訳をこれ以上続けるわけにもいかず、かといいい押し黙ったままでも切りが悪かった。

「やっぱり、黄人の男なんて……」

彼女はじりじりと後退る。同様に心も離れてゆくような気がして、雁真は遣り切れない思いに満たされた。気づいた時には我知らず、彼女を引き止めようとせんばかりに叫んでいた。

「——君は、奇麗だ！」

次の瞬間、彼女は目を見開き、動きを止めていた。雁真本人ですら想像のつかない事だった。

焦る余りについ口から飛び出してしまった本音。だが、もはや後悔しても仕方無い。半ば自棄糞だった。

「気安いだとか世辞だとか、そんなものは要らないんだ。君は綺麗だと思っし、反面黄色いだとか知りもしない呼び方されてこっちは腹だって立ってるさ。」

ただ、俺の正直な思いが君に伝わりさえすれば、それでいい」

雁真は彼女の瞳を真剣に見詰め、そして微笑んだ。彼女は相も変わらず呆然と目を丸めている。その様子を見てみると、彼は次第に罰が悪くなってきた。

「俺、もう行くよ。元気でな」

雁真はさっさと彼女に背を向け、来た方向に歩み出す。真に彼女の事を思うのであれば、これ以上関わり合うべきではないのだろう。辛い手段はあるが。

彼女は生意気だ。生意気だが、それ以上に美しかった。

雁真編 伍章 暗翳（前書き）

五話目。

最悪な仕上がりだ。絶対に改訂する。

——似ていた。

雁真は居間で夕餉を採りながら、昼間の出来事への思いに耽っていた。あれは——あの一時は、夢であったのではなからうか、などと幾度も思った。そのぐらい余りにも呆気なく、短いものに感じられた。

そしてあの強かで美しい少女が、雁真の中で丁度あの夢の彼女と重なったのだ。白く清い肌が、流れるような黒髪が、瓜二つと言って良い程に。

彼女は、誰なのだろう。あの懐とした気品からするに、止んごとなき身分の娘なのではなからうか。一体、どのような優れた両親から生まれた娘なのだろう。将又、どのような奇跡が生じて生まれたのだろうか。

雁真の思考を占めるのは、彼女の事ばかりだ。せめて、彼女の名前だけでも教えて貰っていたなら、どんなに心が楽だったか。きっと外見に見合った、美しい名を持っているに違いない。

あの彼女との出会いが現実で、もし、また巡り会えるのだとしたら……

雁真は溜息を吐く。

「どっつしたの？」

気づけば、菊が彼の顔を覗き込んでいた。食べている途中らしい、夕餉の碗を持っている。

「ん……いや、ちょっと夢心地だった」

「お兄ちゃん、恋煩いでもしてるみたい」

「恋……」

雁真はぼかんとする。

「町で良い娘見つけたんでしょ」

菊に自身満々の笑みで決めつけられ、彼は困ったように笑った。

「そうなのかな……否、そうじゃないんだ」

そう、これが恋なのかと問われれば、そこが曖昧であった。ともすればそうなるのかも知れないが、この感情はもつと別のもの、或いはそれ以上のもののように思えた。

「だけど、やっぱりそうなのかも知れない」

どうも歯切れの悪い返事になってしまった。この優柔不断さには、我ながら呆れてしまう。きっと菊も呆れている事だろうと思っただが……

「そう。やっぱりお兄ちゃんでも、女の人には興味があるんだよね」

菊は力無く笑い、目を伏せた。その様子を雁真は変だ、可笑しいと思った。

彼は雑炊の入った碗を膳の上に置き、箸も置いて体調を窺うように菊を見る。

「菊」

雁真は菊に呼び掛けるが、彼女から返事はない。心なしか、落ち込んでいるように見える。

気に喰わなかったのだろうか、娘にばかり目がゆく自分を。だらしのない兄貴だとも思われてしまっただろうか。

「哀しいのか？」

菊ははつとして顔をこちらに上げ、臆てゆつくりと首を横に振って否定した。

「お兄ちゃんなんて要らないもの」

「酷い物の言い方だな」

雁真は苦笑し、本気で心配してやった事に少しだけ後悔の念を抱いた。

「でも忠次郎さんはとても優しい人だし、私、最期まであの人に尽くしたいと思う」

「しっかりな」

雁真は椀を取り、雑炊を啜った。

「あ、また本だ」

漸く気づいたらしい。菊は唇を尖らせながら、雁真の背後から覗く書物の角を見た。

彼は目を丸くして後ろに手を遣ると、これか？ と、それを彼女の目前に表紙を前にして持ってきた。

すると菊は眉根を寄せて、

「何て読むの、それ？」

「『曾根崎心中』だよ」

「どんな物語なの？」

その問いに、雁真は半ば躊躇うように一拍置き、

「哀しい物語だよ」

大雑把ではあるが、確かな答えだった。

哀しい恋の物語。裏切りと、困窮と、悲恋の。好き合う男女が曾根崎天神の森で心中し、物語は終わる。

彼女はそれだけで満足してくれたらしく、これ以上の追求はしてこなかった。雁真は内心で安堵する。

心中などと言う物騒な言葉は、菊の耳には余り聞かせたくなかった。町では評判の良い作品であるだけに、物語には引き摺り込まれた。が、雁真には刺激がやや強かったらしく、後味が余りよろしくなかった。

「俺、明日辺り町に出かけるから、暫く留守番頼んだぞ」

「良いけど、その代わりちゃんとしてきてね」

ついでに草鞋を売ってこい、と言っているのだ。

「わかってるさ」

ちよつとばかり余計なお世話である。

雁真は膳から麦茶入りの湯呑みを片手に取り、一口啜った。

とつぷりと日が暮れ、空に星の瞬きも浮かび上がってきた頃だった。人の往来が徐々に減り、八百八町が段々と静寂に包まれていったのは。

現在、夜四つの時の鐘が鳴ってから間もなく。木戸も閉められ、昼間は人熱れと喧噪の絶えない町も、今ではめっきり人通りが失せている。

冷たい風は肌寒く、夜寒の表店の大戸も完全に閉め切られている。その狭間の通路を、照明器具の一つも頼らずに歩く一つの人影があった。否、一人と一匹と言った方が正しかった。

人間が一人、その飼い犬と思しき犬が一匹。双方共一寸先の闇ですら臆さぬ平然たる見の熟しで、闇闇を進んでゆく。犬は小柄で、人影は細い体軀をしている。犬が人にやや遅れて従順に付き従う、という形を取っていた。

——今宵も月は顔を現す。歪んだ笑みを湛えながら。

と、人が止まった。犬も止まる。

向こう側の暗闇に、俄に淡い光が灯った。提灯の光である。その正体は男が三人、ただの見廻りのようだった。

「火の用心——……………ん？」

先頭に立っていた男が、目の先の人影に気づいたらしい。声は確と止み、木を打ち鳴らす音も何事かと止む。

「怪しい奴！　そこにおるのは誰だ！」

男達は身構えてずんずんと人影へと近づいてゆく。だが人影は立

ち止まったまま、特に逃げようとはしなかった。

男達が目前にまで詰めたところで、先頭にいた男が人影の正面から顔元に提灯を翳した——瞬間、全員が瞠目した。

「チツ、眩っしい」

そこに映し出されたのは、不快げに目を細める女面の若い青年。防寒用に、頬被りをしている。だが、男達を仰天させたのは外でもない、その青年の目の色だった。

「ワンっ！」

その時、脇から青年を注視していた男の一人に、小さな獣——例の犬の影が飛びついた。

「うわあっ！」

男は予期せず飛び掛かってきた犬の体当たりをまともに受け、地面に強か背中を打った。

「よ、与六！？」

仲間の得体の知れない悲鳴を受けて、残る二人は不覚にも青年を捨て置き、提灯の明かりを声の側にさつと向ける。そして呆然とした。

真っ先に飛び込んできたのは、ふりふりと旺盛に振られる黒い巻き尾だ。仲間の与六の上に覆い被さっているものは、ただの小犬だった。黒の体毛に、茶色い殿上眉が妙に高貴な、豆のような柴犬。与六は気づいているのかいないのか、高が小犬一匹にみっともない悲鳴を上げ続けている。

「何だあ、こりゃあ」

男二人は呆れ顔である。

「ああ、ちつくしよー、この浮気者めが。そいつから離れねえか、
こんの馬鹿犬畜生っ」

その時、男二人ははつとして声のした方を見る。その時には青年は既に二人の横を過ぎており、与六に懐いている柴に向かって嫉妬とも取れる暴言を浴びせていた。だが犬の方には完全に無視を喰らっている。

——高が犬に？ と、二人の男はまたまた呆然とする。
が、直ぐさま本来の目的を思い出し、慌てて二人だけで青年を取り
囲みに掛かった。

「うげっ、だから眩しいってんだよ！」

「て、てめえ、紅蓮の者か」

男は額や蟀谷に脂汗を浮かばせながら、慎重に、注意深くそう訊
ねた。

「ぐ、紅蓮……やっぱり“あけぎり朱劔”かつ」

犬をどうにか退かし、与六は背中を摩りながら起き上がる。

小犬はぴょんと跳び退って身を反転させ、青年の足元へと帰って
ゆく。そしてワンツ、と一声吠えた。小さい体の割には、威勢良い
鳴き声だ。

臆て青年はにやりと笑うと、腕を組んで憎らしいぐらいに悠然と

構えた。よく見れば、腰の帯には刀を佩き、手には革製の手甲を嵌めている。その形なりはというと、下は腰丈の裾から股引が覗いており、上は黒つばい着物に法被はっぴを羽織っただけの、所謂気軽な武装だった。頭髮は例の被り物でほぼ隠されている。一瞬本家と見紛う程に整った面貌の割には、全体的な格好は下級武士並に冴えない。

「まあね。つつてもさあ、オラぁ同心なんだ」

「は？」

男達はぼかんとする。

「んな間抜け面しなさんなよ、旦那方。ほれ、これでどうだえ」

青年は懷から袋を取り出し、更にそこから長さ一尺五寸余の真鍮の棒を取り出した。彼がこれ見よがしに棒を軽く振ってみせれば、青い総紐ふさがゆらゆらと人を小馬鹿にするかのように揺れる。

それは紛れも無く、補吏のみが持つ事を赦される十手じってだった。

「馬鹿言え。どうせ盗んだに決まってる。番所にまで来て貰おうか」

だが、端から疑う男に提灯ごと詰め寄られ、青年は迫る眩しさを避けるように体を反らし、そして段々と不快げに眉を顰めてゆく。犬は男達の後ろへ移動し、相も変わらず興味津々に尻尾を揺らす。

「だぁから止めろつてのよ。」

しかし、盗んだつてのは不適當だぜ。なんせこの棒の持ち主は、既にあの世行き」

青年がにやりと不気味に笑ってみせれば、男達はぞくりと身震い

した。

「何言つてやがるっ」

青年は男達が動揺しているこの隙に、灯とほしから数歩距離を取って安全圏に移動した。

「オイラが現場にいたわけじゃねえんだがよ、こりや間違まちがいなく異形共ヨウキョウの仕業だぜ。

あんた方高が自身番人だろ。見廻ったところで役立たずだし、悪いこたあ言わねえ、とつとと帰んなよ」

青年の見下すような態度が、男達の癪に障ったらしい。先頭の男は眉尻を逆立て、キツと憎々しげに彼を睨めつけた。

「若僧の癖して、厚かましい野郎だぜ。これだから俺達は朱劔なんて好けねえんだっ」

「けどよ、あんた方で言うところの“人外”から治安守ってやってんの、俺等あだぜ？」

青年の尤もらしい言い分に、男達は口を噤んだ。

彼はその様を御満悦の体で見物し、気安くも拍子木を持った男の肩をぱんぱんと軽く叩いてきた。男は触れられた瞬間にビクツと震え、彫刻のように体を硬くした。

「中にはあんた方を黄人とか言いやがる奴もいるが、オラあ好きだ。まあよ、今宵の誼てんぎらつて奴だ。今度、天麩羅奢てんぷらりな」

「てつ、天麩羅あ？」

絡まれた男は拍子抜けしたように、間抜けな声を発した。

「そうそう。……今宵の礼も兼ねてだ」

次の瞬間、獣の唸り声に男達は一斉に振り返った。

犬がウー……と咽を唸らせながら、男達の来た方向に向かって警戒的に構えている。その先の奥まった暗闇の中に紛れている、何かに対するように。男達も、犬の反応から何か良からぬ気配を感じ取ったのか、びくびくと震え出す。

辺りに、徐々に朧げな白さが増してくる。空から、銀色の月が姿を現そうとしていた。そして——鋭く冷たい風が吹き抜けるような深い地獄の底から鳴り響いてくるような、悍ましき鋭利なる亡霊の鬼哭。男達は慄然と立ち竦み、青年の背後でただただ戦々競々と暗闇を見詰めている。

「そおら、来た来た」

青年はにやりと笑い、刀の柄に指を滑らせると——カチリ、と滑らかに鯉口を切った。

暗闇の中から沸き起こるようにして、生々しく不快音を発しながら蠢動する輪郭がある。このような死に心地の中でも唯一、彼だけは悠然たる理性を以て闇と相対していた。

「異形のお出ましでい」

青年はその“紅い双眸”に、修羅の光を宿した。

雁真編 伍章 暗翳（後書き）

自分の作品の違和感の一つに気づいた。それは文章がすつきりして
いないのだと思う。

もしここまで読んで下さった酔狂な方がおられるなら、感想さえ頂
ければ私はきつと救われます。

雁真編 陸章 再会（前書き）

六話目。

いつか改訂すると思います。

雁真編 陸章 再会

——貴方、ねえ貴方。

何故私を殺したのですか？

私はただ、貴方に愛されたただけなのに。

ああ……何て酷いお方。

私はこんなにも痛いのに。貴方に果てなく貫かれたこの胸が、未だに痛むというのに。

ねえ——

雁真は跳ね起きた。

背中を丸め、はあはあ、と絶え間なく息急ぐ。全身にはじんわりと盗汗がくっつき、気持ち悪い。

心臓の音は忙しく、彼は昂るままにバツと横を見遣った。

「……」

灯明皿を隔て、スースー……、と規則正しく寝息を立てる菊の寝顔があった。丁度体勢が横向きになっており、雁真の方を向いて寝ていたのだ。彼は暫しその寝顔を見詰め、徐々に冷静を取り戻していった。彼女の顔が僅かに見えるという事は、もう夜明けか？

彼は臆て正面に顔を向け直し、汗塗れの額や蟀谷にべったりと引ついた髪の毛を両手で撫で除けた。夜明け、ではあるが起きるにはやや早かったような気がする。時告げの鐘も未だ鳴っていないようだし。だが今から寝直しても十分な時間は取れまいと判断し、起き上がって布団を畳む事にした。

本来ならば菊が先に起きて雁真は彼女に起こされるといふ場合が多いが、今回だけは特別のようだ。おそらく悪夢を見ていたのだろうな、と雁真は何処か判然としない思いだった。

だが、また彼女が自分の前に現れたのだと思った。

恰も怨霊のような脅威を纏って。

雁真は家から外に出る事にした。秋分の時期を迎えてからというもの、早朝の空気には冷氣が馴染むようになってきた。木綿の着衣だけではやや肌寒い、といったところだろうか。

家の付近でちよつとばかり空気を吸い込んでまた引き返そうと考えていたのだが、村を出て、気づけば例の木立のある場所にまで足を運んでしまっていた。勝手に足が動いており、何もこれっぽっちも考えていなかった。家を出た直後よりも、幾分か空は明るくなってきた。

雁真は木の幹に片手を当て、不味い、と苦笑いを浮かべながら五間程離れた先に流れる川を見た。小さな橋が架けられ、向こう側に繁茂する広めの草地へと繋がっている。茅場の付近にある、草叢だった。

次第に、雁真から表情は消えていった。

確かここは、彼女と出会った場所でもあったか。決して忘れていたわけではなかったのだが、有ろう事かここまで無意識に足を運んでいたとは。何らかの運命に引き寄せられたかのような気分だ。

冷涼な空気は尚纏わりつくが、それにも構わず雁真は緩りと歩を進めていた。

川に近づき橋に差し掛かると、雁真はふと渡り際に川岸を見る。白露の節季までは朱く鮮やかだった彼岸の花も、今では深緑の艶がある線状の葉を地面から迸らせるように出している。心悲しい情景である。

雁真は橋を渡り終えると、向こう岸に足を踏み入れた。

その一面は、枯れ草の密生した草叢で占められている。

彼は乾いた土をザクザクと踏みながら、足の向くままに枯れ野の中へ深く入ってゆく。足元に精気の失せた草が軽く触れる度に、心地好い刺激を覚える。

そして暫くゆつくりと進んだ後、雁真はごく落ち着いた様子で緩々と足を止めた。その表情は慈愛の光に満ちたように優しく、純真で穏やかな色を湛えていた。

顔を現したのは、時期外れの白無垢の花。柔和で優しい微笑みを湛えながら、それはただ一つの小さな存在でありながら、広く胸に包み込むように彼を迎え入れたのだ。朱く婉然たる笑みで誘惑してきた花とはまた別の、絶対無二の魅力をこの白き花は纏っている。丁度、あの娘の姿が頭にありありと浮かんだ。夢の中の偽りの恋人が妖艶なる朱き花であつたなら、彼女は純粹なる美しさと意志を秘めた白き花であろう。

彼女に会いたい——その思いは、より一層雁真の胸の中で膨らんでいた。

本の三日程……否、今となつては三日もの遣る方無く長い時が過ぎていくのだ。彼女はもはや、これだけ経てばこの近辺にいる筈など無いのだ。

でも会いたい。会つて確かめたい事がある。彼女という存在の意義を、彼女という存在の運命を。

自分勝手な考えかも知れない。きっと彼女は迷惑千万に感じるだろう。だが、雁真はもう一度彼女に会わない限り——おそらく、冷静でいられぬに違いない。きっと、死ぬまでの人生が彼女の影を引き摺るものであり続けるだろう。

これは恋なのか。或いは、それ以上の計り知れないものである。

——一目惚れ、したかな。

雁真は記憶に鮮烈な彼女の容姿に思いを馳せる。卓越した絶世の

美貌。

彼のものよりも黒い長髪は、一房掬えば彼の指と指の間の僅かな隙間から逃げ出すに違いない。純白の柔らかそうな肌は品があり、触れれば吸いつきそうだ。それは雁真の理想像を優に凌ぎ、持て余す程の才能を発揮している。持て余す故に、彼女への恋心を抱くなど分不相応である。

ただし、彼女の所為で他の娘の存在が霞んで見えるようになったのは確かである。あの頃秘めていた憧れは、既に物の見事に色褪せてしまっている。他の娘で満足できるのか、という自分自身への憂慮を雁真は常に感じずには要られない。

——女は外見ではなく、心根を良くすべし……と、ある女子教訓書の中に書かれていたのを覚えている。菊に読み聞かせてやろうと過去に購入を試みた書物だが、当時の手持ちの関係で断念したものだった。

器量は良くも悪くも、中身さえしつかりしておけば世の中を生きやすい、と言う事だろう。外見が美しくとも、それが単なるお飾りであつたならそれまでだ。男としてもそんな女は願い下げである。生意気な女など以つての外で、正しい女子像に適おう筈が無いのだ。そうなれば当然、男はそんな女よりも誠実で従順な女の方に惹かれるのが筋だろう。見てくれだけの擬装に惑わされるべきではないのかも知れない。

よく考えてもみる。見目の美しい女程得てして多情ではないか。中には心根まで透き通るように美しい佳人もいるにはいるのかも知れない。ただし、極稀にだ。

女は従順であればこそ、男も安心して腰を据えられるというもの。雁真の母親はお世辞にも美人の器量とは言えなかったが、家事を熟し、常に夫の傍らで世話を尽くす善良な人と言えた。菊もそうだが、やはり夫に尽くしてこそその妻である。

だからこそ、雁真は即座に思い直すべきなのである。彼女の魅力

にばかり囚われていては、傍目にはそれこそ様は無い。何も彼自身の行く末を彼女の手に乗せる必要性など何処にも無いのだ。

それに、一度出会えればというだけだ。後一度限り。それだけで、雁真は一切の未練を思い切れる自信があった。その根拠は今、彼の胸中にある。

「……」

雁真の花を見下ろす顔から表情が消える。

一目惚れ程度、よくよく考えてみれば取り立てて問題にすべきものでも無かったか。人間誰でも美しいものには惹かれて当然であるし、一概に美人に魅せられた人間が悪いとは言えない。むしろそれは良い態度ですらあるのだろう。

魅力的な異性を見つければ、心惹かれるのが人の常。これを恋だと言うならば、雁真は確かに彼女へ恋した事になる。一瞬擦れ違っただけの、束の間の恋を。分不相応な恋でも、これだけは詮方無いのだ。

一体、彼女は何処にいるのだろう。

彼女への決別の思いを込めて立ち去ったのは雁真の方で、あの時の自分の判断に彼は悔いなど無かった。きつとあのまま執拗に離れていなかったなら、彼女からは心底憎悪を買っていた事だろう。

だが、反面三日もの遣る方無い間を過ごした自分が恨めしい。思っても仕方ない事だが、思ってしまうのだ。

彼女ときっぱり決別した後に来た、会いたいという矛盾。自分も案外手前勝手な性格をしているのだな、と雁真は自嘲の笑みを浮かべた。

彼はグツと拳に力を込め、決意の顔で花を正視する。

彼女を放って置けない理由——それは、彼女をこの孤独の花でた

とえてしまったばかりの過ちと言えよう。

「君の言う通りさ」

あの時に垣間見た少女の寂しげな表情が、怒りに満たされた表情が、苦渋に苛まれた表情の全てが、雁真の視界を鮮明に過ぎった。

「本当に烏滸がましい奴だよ、俺は」

どうして君は、こんなにも……………

「可笑しなものね」

シャラン

心臓がドクン、と高鳴った。

雁真の瞳に狼狽が走り、逸る思いのままに彼は振り返る。その時、丁度彼の視界を黒色の糸と微香が横切った。

「花の香りに誘われてきたら、まさか、貴方までいたなんてね」

気づいた時には、彼女は花を覆い隠すように屈んでいた。その黒髪を流した丸い背中が華奢で、雁真は覚えぬ見蕩れていた。しかし直ぐさまはっとし、

「香り？」

香りなどしない筈だ。多少はあるのかも知れないが、殆ど無臭と

言えるだろう。

「――帰って」

彼女が突然発した言葉に、雁真の胸はズキツ、と痛んだ。彼女は未だに、彼を厭わしく感じているのだ。

彼女はこちらに少しも振り向きもせずに、言葉を続ける。

「この花が萎れて無くなるまで、この場所には近づかないで」
「その時にはきつと、君はいないんだろうな」

暫く、間が開いた。

「もう一度言うわ。帰って」

相変わらず彼女の表情は分からない。だが、その声音は無情なくらい淡々としていた。

彼女は雁真などに関心も拘りも無いのだ。元より雁真の一方的なものだったのだから取られても仕方無い態度ではある。

だが、彼にも言い分というものがある。

「君は随分、自分の都合の好いように生きてるんだな」

雁真はじつと彼女の背中を見る。

良家の娘。下々の人間の経験する苦労の数々を何一つとして知り得ない、彼女の自分本位の態度はそんなものだ。

「どんな事情で三日間もこの近辺にいるのか分からないし、俺に探る権利なんてない。俺を嫌いなら、嫌いと思ってくれてもいい。ただ、そんな態度じゃ人に怨まれるぞ」

人の都合ばかり配慮できる程、人は甘く無いのだ。雁真は決して
お人好しなどではない。周りがそう決めつけているだけだ。

彼女から返事はない。雁真は、溜息を吐き出したくなるのを押し
殺した。

「君がどんなに優れた容姿をしていても、人の思いを顧みられない
のは哀しい事だよな」

「……帰って」

次に返された彼女の語気に、大した力は無かった。一步間違えれ
ば、掠れる程に。

「残念だよ。本当に」

雁真はただ彼女との再会を喜びたかっただけなのに、結局待ち受
けていたものは予想外の皮肉だったと言う事だ。

こっ 酷く裏切られた気分だった。

三日も経てば心も変わる、などと思いつ込んでいた自分が愚かな
だけだったのか。

何にせよ、雁真はまた彼女から離れるしか無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7841y/>

修羅の一族・咎人語り

2011年12月19日12時47分発行